

ユーモア・
ミステリー

一番長いデート

赤川 次郎



集英社文庫

あかがわ・じろう

昭和23年福岡生まれ。桐朋高等学校卒。41年から53年まで日本機械学会に勤務。51年文藝春秋の「第15回オール讀物推理小説新人賞」を受賞。コバルトシリーズに「幽霊から愛をこめて」「ふたりの恋人」「吸血鬼はお年ごろ」「吸血鬼よ故郷を見よ」のほか、著書に「三毛猫ホームズの推理」などがある。趣味は映画、クラシック音楽。



一番長いデート

COBALT-SERIES

0193-610525-3041

昭和57年11月15日 第1刷発行
昭和60年12月10日 第31刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著 者 赤 川 次 郎

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集 英 社

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10

電話 東京 (230) 6171 (販売)
(230) 6268 (編集)

印刷所 凸版印刷株式会社

COBALT-SERIES

一番長いデート

赤川次郎

集英社文庫

目次

一番長いデート	5
孤独な週末	97
殺してからではおそすぎる	197

一番長いデート

不公平について

坂口俊一さかぐちしゅんいちは、恋人との待ち合わせの場所へ、重い足取りで向かっていた。

「重い」は「軽い」の間違いではないかと言われそうだが、俊一の場合は、足取りが重かった。しかも目的地が近づくにつれ、ますます重くなって、ついには、アスファルトに食い込むほど——は、大げさだが……。

それも無理もないというもので、俊一が今からデートする相手は、自分の恋人ではなかったのだ。

坂口俊一は私立大学の一年生。しかし、同じ学年の女子学生などから、よく、「坊っちゃん」「お坊っちゃん」などとからかわれる。

俊一とて、自分が若く——正確に言うと、幼く——見られるのも仕方ないとは思っている。

背も低いし、スタイルはそう悪くないけれど、大体が小柄で、ちんまりしている。しかも童顔。丸っこい顔に、メガネをかけている。かなりの近視である。

これで、頭の方がすば抜けて優秀とか、何かスポーツが得意とか、ピアノが巧いとか、ひとつでも人より抜きん出たものがあればいいのだけれど、残念ながら俊一の成績は、高校時代からずっと、下から数えた方がかなり手間が省けるという状態。

スポーツもからきしだめで、いまだに泳げない。平衡感覚に問題があるのか、自転車にも乗れない。一度、高校生のときだったが、クラス対抗のソフトボール大会に出て、奇跡的にヒットを打ち、得意になって、三塁方向へと全力疾走した……。

歌っては音痴を証明し、年に三度は財布が定期入れを落とすというのが特技というのでは、およそ女性にもてず、かつ人望もないのが当然であろう。

今の私立大にしても、父親が裏からあれこれ手を回してくれて、やっと入学したというのを、俊一自身、よく知っている。

もちろん、父親も母親も、俊一にそんなことを言いはしないが、俊一はちゃんと、大学関係者の誰やらに母親が電話しているのを聞いているのである。

しかし、俊一はだからといって非行に走るようなことはない。もともと自分の実力を知っているから、これも世の中を渡って行くには仕方ないことなのだと思っているのである。

俊一のいい点は、ともかく人の良さというか、子供の頃から、誰とでも遊んで喧嘩しないという、性格の素直さであろう。それは裏を返せば、何かを頼まれると断り切れないという気の弱さでもある。

そういう性質は、あまり他人から高く評価されることはなく、ただ馬鹿にされ、利用されること

ばかりが多い。

それでも、俊一は決して、世間を恨みはしなかった……。

今日のデートだって、その口で、同級の竹本洋一郎から、

「今夜、オレ、うっかりしてデートふたつ約束しちゃったんだよ」

と言われたのである。

「だから、ひとつお前に譲るからさ」

人の恋人とデートして、どこが面白いもんか。馬鹿にするのもいい加減にしろ、と怒鳴ってやりたかったが、俊一は、

「うん、ありがとう」

と礼まで言っていたのである。

竹本は二枚目で長身、さっそうとしていて、女の子なんか磁石に吸い寄せられる鉄片のごとくつついて来る。

しかも、その手の二枚目が頭の方は空っぽだという常識に反して、竹本は成績も良く、いつ勉強するのかとみんなが首をひねるくらい、まめに女の子と付き合っているくせに、テストではトップを争っているのだった。

おまけに父親は大企業の社長で、車はいつも赤いポルシェ。

「あんなの、垢抜けしてないわよ」

といいながら、女の子は、つつい竹本の周囲に群がっていく。

俊一とて、車の免許を取ろうと、教習所へ通ったことはあるのだが、発進停止に一週間を費やし、教官にののしられて、やめてしまった。

人生は不公平に出来ているということを、俊一は十八歳の身で、いやというほど知りつくしているのだった……。

「まったく、竹本の奴もいい加減だよ」

と、ブツクサ言いながら、新宿の地下道を歩いていたのだが……。

「あれ？」

俊一は、キョロキョロと周囲を見回して、

「俺、どこへ向かって歩いてんだろう？」

と呟いた。これで女性にもてるはずがないのである。

ところで、もうひとり——というか、ひと組だったが、人生の不公平さを嘆いている男たちがいた。

——今にも崩れそうな居酒屋が軒を並べた横丁の、その一軒。

どの店も、倒れずに済んでいるのは、お互いよりかかり合って、互いを支えているのかもしれない。だから一方の店があまり込んで来ると、隣の空いた店へと客を回すことがあるくらいだった。

重量のバランスが崩れると、どっちの店も倒れかねないからである。

二階の座敷——といっても、ほとんどごぎに等しい畳に、ふたりの男が座っていた。ふたりの間

には、なぜか足の長さが違っていて、ガタつく座卓がある。

その上に、一丁の、黒光りする拳銃が置かれていた。

「はい、ビールね」

と、店の女主人が階段をミシミシいわせて上がって来る。

「――何だが今日は元気ないじゃない、ふたりとも」

「うるせえや」

と、小柄な方が言った。何となく、いつも「灰色」というイメージで、といって、政治がらみの「灰色高官」のような大物ではなく、いつも、くすんで薄汚れた感じがするので、灰色に見えるのである。

「まあ一杯やんなさいよ」

と、女主人はコップへビールを注いで、

「あら、モデルガン？ カッコいいじゃない。私、大好きなのよ」

ヒョイとその拳銃を手にとると、ふたりへ銃口を向けて、

「バン、バン！」

と言った。

「やめろ！」

ふたりがあわてて頭を低くして畳に這^はいつくばった。女主人はカラカラと笑って、
「やだ、ふたりとも本物みたいに怖がって。そんじゃね、ごゆっくり」

階段を降りかけ、

「ゆっくりするなら、もう二、三本は取ってよ！」

「——ケチな女だな」

と、やっと起き上がった「灰色」が言った。

もちろん名前は「灰色」ではない。

「ああびっくりした」

もうひとりが息をついて、

「本物なのに、この銃は」

もうひとりの方はぐっと大柄で、この二階へ上がるのにも慎重を要するタイプだった。ふたりとも、まだそんなに年齢は行っていない。せいぜい三十そこそこであろう。

「ねえ兄貴」

と、言ったのは、でかい方だから、何だかおかしい。

「何だよ」

「ビール飲もうぜ」

「お前はいいよ、食うか飲むかしてりゃ幸せなんだから」

ふたりは二本のビールを大切そうに、少しずつ飲みはじめた。

「兄貴。——どうすんだい？」

「何を？」

「こいつだよ」

と、目の前の拳銃を指さす。

「やる他ないじゃねえか」

と、灰色の方がやけっぱち気味に言った。

「俺たちで？」

「そうさ。そういう命令だ」

「だって……俺、こんなもん、使ったこともないぜ」

「俺だってそうだ」

弟分の大きい方が目をパチクリさせて、

「あれ？　いつか出入りで何人も撃ち殺したって言ってたじゃないの」

「あ、あれは、お前……ちょうどその日は……病気で寝てたんだ」

兄貴分の灰色の方はエヘンと咳払いせきばらいして、

「ともかく、こいつを巧くやりとげりゃ、俺たちの格もぐっと上がるってもんだ」

「生きてりゃ、だろ」

大きい方は、だいぶベシミスティックな性格らしい。

「いやなこと言うなよ。ビールがまずくなるぜ」

「だって……あんな大物を、みんなの目の前で撃ち殺して、逃げられると思うかい？」

「知るもんか」

「逃げらんなきや捕まっちまうんだぜ」

「捕まりゃいいよ」

と、灰色の方がグイとコップを空にした。

「何年か刑務所へ入って、ハクがつくってもんだ。——最悪なのは、向こうの連中に捕まったときさ。なぶり殺しに合うぜ、きつと」

「俺、あんまりなぶり殺されんの好きじゃねえよ」

「俺だってそうだ」

ふたりはしばらく黙り込んだ。

そして、まるで拳銃がパツと消えてなくなってくれないかと願うように、ふたりして、じっと拳銃を見つめていた。もちろん、消えるはずがない。

「——もし、しくじったら？」

と、弟分の方が言った。

「さあ。やっぱりなぶり殺しかな」

「どっちにしても救われねえのか」

「そういうこった」

「逃げちまおうか」

「馬鹿言え！ どこへ行くってんだ？ 金もないのに」

「じゃ……警察に行って話してみたら？」

「裏切者はもっとひどい目にあうぜ」

「それじゃ、警官になるうか」

いいアイデアだと当人は思ったらしいが、兄貴分の冷ややかな視線に出会って、頭をかいた。

「結局、俺たちみたいなたつ端がいつも苦勞するのさ」

と、灰色の方が、あきらめ切ったような調子で言った。

「誰か代わりにやってくれねえかなあ……」

と、大きな方がグチりながら、一気にコップを空にした。

「——おい」

灰色の方が、何やら思い付いたようで、顔を上げた。

「お前、今何て言った？」

「え？」

「誰か代わりに、か……。それだ！」

大きい弟分はキョロキョロと回りを見回して、

「どれだい？」

ときいた。

「馬鹿！ いいか、何も俺たちがやらなくたって、誰か代わりにやる奴を見つけりゃいいんだ！」

「そんな奴、いるかなあ？」

「いやでもやらせりゃいいのさ」

と、灰色の兄貴分が言った。

「いいか、俺にちよっとしたアイデアがあるんだ……」

と話しかけて、階下の方へ、

「おい！ ビールあと二本！」

と怒鳴った。